

生保詐欺事件の背景は 津地裁での刑事裁判を傍聴して

12月8日、鈴鹿市の生活保護費詐欺事件で逮捕・起訴された、越山・下辺被告の公判が、津地裁でありました。4日の市議会一般質問で私は、「詐欺の被害者である市は、なぜこの不正受給を止められなかったのか」とただしましたが、納得のいく答えはなく、「担当者まかせで、組織としての対応ができなかった」との見解が繰り返されました。それでは裁判の中では、どう解明されるのだろうか、森川議員とこの日の傍聴に出かけました。

市職員は彼らを「越山グループ」と呼んでいた

この日の公判で、被告は兩名とも検察官から示された罪状と事実をすべて認め、裁判は1日で結審となりました。検察官の陳述の中で、越山と下辺が詐欺を行なった背景として、越山が生活保護などの手続きや金銭の受け取りを仕切っていた人たちを、市のケースワーカーたちは「越山グループ」と呼んでいたこと、毎日のように窓口に来て要求を通すように言い立てたこと、などが明らかにされました。職員にとって、越山グループは非常に「やっかいな存在」だったと推測されますが、ある職員は「請求の金額の大きさに驚いたが、前任者も上司も認めていたから、やむをえなかった」と、当時の事情を供述しています。

越山は行政書士事務所や社会福祉法人で得た知識を使って、窓口で職員に強引に言うことを聞かせるテクニックがありましたが、一方の職員側はこれに集団的に立ち向かうことが出来ず、個々に押し切られてしまったのです。しかも、申請から支払いまでいくつかあるチェックポイントも、通ってしまいました。職員は「人」を見ずに「書類」だけを見ていた。だれも「おかしい」と思っても声を上げなかった。ここが最大の問題だと感じました。

新規水源（長良川系）の料金下がる

4日の市議会本会議で私は、上水道への新たな水源として県企業庁から北勢水道（長良川系）2200トンを受けるにあたっての料金について質問しました。水道局の答弁は、給水量の大きな変更（47600トンから18000トン）による計算で、前回（平成10年）より低額になるとのことでした。鈴鹿市は受水量を13000トンから2200トンに減らしたので、水道料金は年額にして10億円から1億円（フル受水の場合）に減少します。

計画年	受水量	基本料金	使用料金	年間料金
H10	13000 ^ト	3560円	97円	10億円
H20	2200 ^ト	3130円	39円	1億円

もし当初計画どおりの受水を進めていたら、莫大な料金負担のために、市民の水道料金の大幅値上げは避けられなかったところでは、私たちが何度も「長良川導水は要らない」と求めてきたことが、この結果になったのです。

やっぱり自己水源の方が、安くておいしくて安心

鈴鹿市の水道は、鈴鹿川の伏流水を汲み上げた、おいしくて安全な自己水源を主体とし、その他に北勢水道用水と三重用水からの受水も入れています。今回の「長良川系」は、量的には必要ないものです。しかもその水は、北勢水道と同じ木曾川用水から別ルートで来るだけで、5倍も高い水なのです。本当に「もったいない」ことです。

水源名	取水能力	日平均取水量	基本料金	使用料金
自己水源	95400 ^ト	68349 ^ト	—	—
北勢水道	10000 ^ト	5222 ^ト	680円	39円
三重用水	6600 ^ト	4239 ^ト	3300円	65円
長良川系	2200 ^ト	(H23より)	3130円	39円

この不況の市税収入への影響は？

アメリカ発の世界不況が日本にも押し寄せてきています。自動車産業が中心の愛知県、豊田市の税収減がニュースになっていますが、ホンダの街・鈴鹿市はどうでしょうか。12月議会の総務委員会で、見通しを聞きました。

今年度の市民税は、当初予算176億円が5.3億円マイナスで170.7億円の見込み。内訳は、個人市民税がプラス1.4億円、法人市民税がマイナス6.7億円とのことです。一方、固定資産税が償却資産の増によりプラス6.7億円で、市税全体としてはプラス1.4億円という見通しです。

しかし、来年度はどうかと聞いても、「分からない」とのこと。ホンダの鈴鹿工場はフィットなどの小型車が主力なので、今は減産にはなっていませんが、来年以降どうなるかは不透明です。ここ数年、比較的順調な税収で安定していた市財政ですが、今後は予断を許しません。

新名神高速道路の地元説明すすむ

新名神高速道路の四日市ジャンクションから亀山西ジャンクション間27キロ区間の事業化がすすんでいます。鈴鹿では山麓の椿地区から庄内地区を横切ります。椿小学校の北側には、パーキングエリアが計画されています。この秋には、関係地区の役員レベルの説明と要望の聞き取りが行なわれ、来年度には一般への説明、用地交渉とすすむ予定だとのことです。

亀山～大津間の工事も、始まったらどんどん進み、今年2月に開通しました。四日市～亀山間の完成予定は平成30年度とされています。工事が始まれば、西部地域の風景は大きく変わるでしょう。

来年度予算への要求書を市長に提出

日本共産党鈴鹿市委員会は、毎年予算要求書を提出し、市長から回答を受け取っていますが、今年は11月17日に提出しました。内容は「暮らしと福祉について」「安全安心な市民生活について」「文化・教育について」「市民の立場に立った分かりやすい行政について」に分類して、合計37項目です。国保税の値上げや保険証の取り上げをしないこと、中学校給食を実現すること、図書購入費を増額すること、市税滞納者への親身な対応をすること、などなど、切実な市民要求ばかりです。市長からの回答は1月の予定です。

ずいそう



さらば、弱肉強食主義

テレビ番組のコメンテーターとしておなじみの森永卓郎氏が、ウェブサイト「マガジン9条」に連載している「政治経済学講座」が、1冊の本になった。タイトルは「こんなニッポンに誰がした」。始まりは、小泉首相にマスコミや多くの国民が熱狂していた2005年3月、それから安倍、福田と替わり、最後は麻生首相になった2008年10月までの30回分、3年半の間リアルタイムでニッポンの政治と経済に警鐘を鳴らし続けた評論集である。

まじめに働けばふつうに暮らせる世の中に

森永氏は、マスコミがこぞって持ち上げていた「小泉構造改革」・市場原理主義を正面から批判し、また憲法9条を守る論陣を張ってきた。その姿勢は一貫していて、読んでいても頼もしい。以下は、森永氏の語録。

「戦争肯定派と市場原理主義者に欠けていることは何でしょうか。それは、他人の痛みや悲しみや喜びを自分のものとして感じ取ることができる感性だと、私は思います。」(2005.4)

「『改革を止めるな』そうした小泉首相のキャッチフレーズから始まった小泉劇場に国民は酔いました。しかし、それがいかに危険な進路を日本にもたらそうとしているのかに、気づいている人は少ない。」(2005.12)

「私は逮捕される前のホリエモンに言いました。『あなたは悪いことをしたと思わないんですか。』ホリエモンの答えはこうでした。『悪いことをしたなんて、全然思いませんね。』経済の戦争も、やはり相手への思いやりのなさから生まれるのではないのでしょうか。」(2006.2)

「日本は平和憲法を持っているから、戦争のために人的協力も資金協力もしませんとなぜはつきりと言えないのでしょうか。それを言う能力がないから日本の為政者たちは、憲法改正を急いでいるのかもしれない。」(2006.5)

「金融資本主義はいま、断末魔の叫びをあげています。」「それでは、投機資本が消滅したあと、日本と世界にどのような社会がやってくるのでしょうか。私は、ごく普通の社会がやってくるのだと考えています。ごく普通の社会というのは、人類が社会をつくったときの本来の姿に立ち返った社会です。」(2008.9) 森永氏の言う「普通の社会」を、早く実現しましょう。